

⑫ 友情のメダル

一九三六年（昭和十一年）、第十一回オリンピック大会が、ドイツのベルリンで開かれた。

日本は前回のロサンゼルス大会（一九三二年）で、陸上競技や水泳、馬術などでよい成績をあげたうえ、つぎのオリンピックが東京に来そうだというので、二百四十七名もの代表団をこの大会に参加させた。

スポーツ好きのドイツ国民だけに、すばらしい競技ぶりに対しては、勝ち負けにこだわらず、スタンドから盛んな拍手と声援が送られた。とくに、西田、大江両選手の活躍した棒高とびの競技は、数万の観客を大いにわかせるものであった。西田修平選手は、私たちの郷土、和歌山県那智勝浦町の出身である。

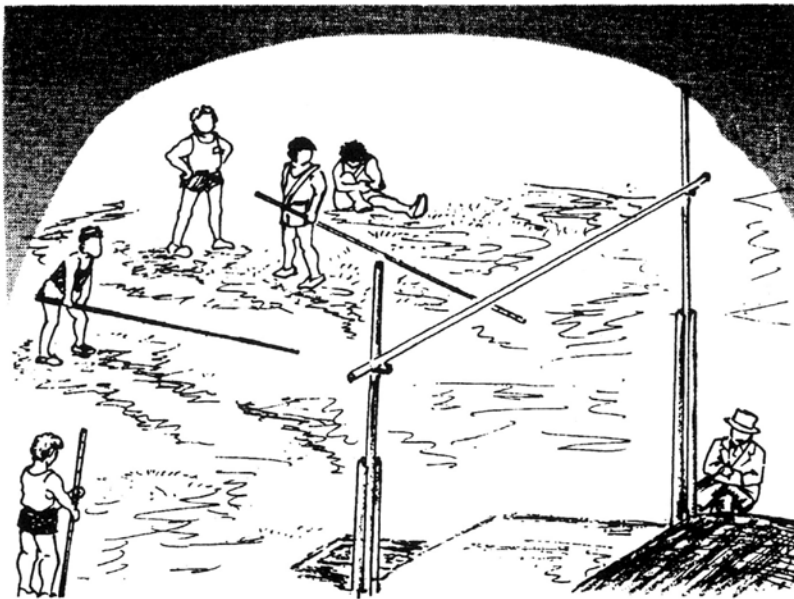
午後四時、午前中の予選をパスした二十名の世界の選手たちによって、棒高とびの決勝が開始された。この中に、日本期待の西田、大江、安達の三選手や優勝のうわさの高いアメリカのメドウズ、セフトンら世界の一流ジャンパーが

まじっていた。

バーの高さが、四メートル、四メートル十五センチと上げられていくうちに、試技を三回とも失敗して、つぎつぎと失格していく選手が出てきた。

バーは、四メートル二十五センチに上げられた。競技場外のグルネワルドの森は、すでに夜のやみに包まれて、雨にぬれたフィールドのしばふの緑が、あざやかに照明にうかびあがった。

この高さへのちよう戦に残ることができたのは、アメリカの三人と、日本の西田、大江両選手の五人だけとなった。まず、メドウズ選手があざやかにとびこし、続いて、西田選手が、背中の四〇〇番のゼッケンを空高くひるがえして、みごとにとびこした。拍手と声



援が場内にどっと鳴りひびいた。

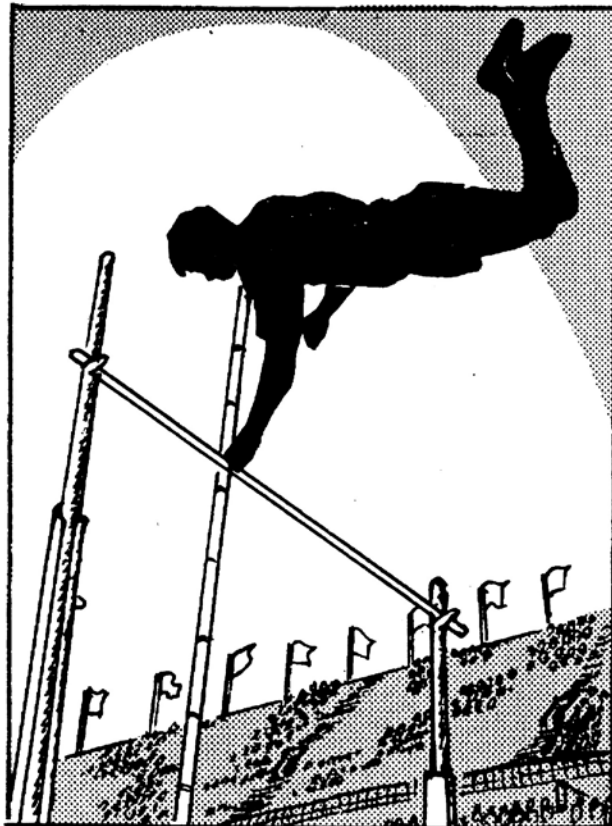
このあと、セフトン選手は二回目に成功。西田選手は早稲田大学わせだのこうはいでもある大江選手につきっきりで、きんちょうぎみの大江選手を落ち着かせようと、はげましの声をかけ続けるのであった。大江選手はこれにこたえて、二回目にみごと成功、四名の中に残ることができた。

いよいよ四メートル三十五センチ。

もう、夜の九時だというのに、観客はだれ一人席を立とうとせず、アメリカ二人、日本二人の対決を、かたずをのんで見まもっている。

アメリカの第一人者メドウスが、これを見ごとにとびこした。さすがに強い。

続いて日本の西田選手。おしいところで体がバーにふれ失敗。大江選



手、セフトン選手も失敗して、優勝はメドウズ選手に決まった。

そのあと、二、三位決定のため、バーは四メートル十五センチにもどされた。

西田、大江両選手は最後の力をふりしぼってけんめいにとび、これに成功。

セフトン選手は、ついに力つきて、二、三位は日本と決定した。

審判長しんぱんから、二、三位をどちらにするかたずねられた二人は、ゆずり合って、なかなか決まらない。

夜もふけ、スタンドの人びとは順位決定を待っているので、結局、四メートル二十五センチを一回目でとんだ西田選手が二位、大江選手が三位となって、五時間半にわたる大熱戦は終わった。順位を知らせるアナウンスを聞きながら、観客は大スタンドをゆるがすような拍手をおしまなかつた。

この大試合のあと、西田、大江両選手が二人で話し合い、銀、銅二つのメダルを半分ずつつなぎ合わせて、めいよを分かち合った。

